

令和5年度

# 病害虫発生予察情報 第1号

## 長期予報

北海道病害虫防除所 令和5年(2023年)3月24日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

札幌管区気象台発表の2月21日付の暖候期予報および3月20日付の3か月予報は以下のとおりです。

### 北海道地方3か月・暖候期予報 (4月から8月までの天候見通し)

暖候期 令和5年2月21日  
3か月 令和5年3月20日  
札幌管区気象台発表

#### <気温の各階級の確率(%)>

4月	20	40	40
5月	30	30	40
6月	20	40	40
6~8月	20	40	40

■低い □平年並 ■高い

#### <降水量の各階級の確率(%)>

4月	30	40	30
5月	30	40	30
6月	30	40	30
6~8月	30	40	30

■少ない □平年並 ■多い

- 春(4月) : 北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
- (5月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。
- 夏(6月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
- (6月から8月) : 夏前半を中心に太平洋高気圧の北への張り出しが強く、暖かい空気に覆われやすいため、夏の平均気温は平年並か高いでしょう。夏の降水量は、ほぼ平年並の見込みです。

## 令和5年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎: やや多～多、□: 並、△: やや少～少を示す

注2) あぶらな科野菜における近年の発生状況はキャベツでの発生量

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		30	R1	2	3	4	発生期	発生量
水稲	いもち病(葉)	△	△	△	△	△	並	やや少
	いもち病(穂)	△	△	△	△	△	並	やや少
	紋枯病	□	△	◎	△	◎	やや早	やや多
	縞葉枯病	□	□	□	□	□	—	やや多
	ばか苗病	□	□	□	□	□	—	並
	苗立枯病	□	□	□	□	□	—	やや少
	種子伝染性細菌病	△	△	△	△	△	—	少
	ニカメイガ	△	△	△	△	□	—	並
	ヒメトビウンカ	□	◎	□	△	△	やや早	やや多
	イネドロオイムシ	△	△	△	△	△	やや早	少
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	△	◎	△	□	□	やや早	やや多
	イネミギワバエ	◎	◎	□	△	△	やや早	やや少
フタオビコヤガ	△	△	△	△	△	やや早	少	
秋まき小麦	赤さび病	◎	◎	◎	◎	□	やや早	やや多
	うどんこ病	△	△	△	□	□	やや早	並
	眼紋病	△	△	△	△	□	—	少
	赤かび病	◎	△	△	△	□	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	◎	△	□	△	□	—	並
	ムギキモグリバエ	△	◎	□	◎	◎	やや早	多
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	◎	△	△	△	△	—	並
	ムギキモグリバエ	△	△	△	△	□	やや早	並
大豆	べと病	△	△	△	△	□	並	並
	わい化病	□	□	□	△	△	—	並
	マメシンクイガ	△	△	△	△	△	並	少
	食葉性鱗翅目幼虫	△	△	□	△	△	やや早	やや少
	タネバエ	△	△	□	□	□	—	並
小豆	菌核病	△	△	△	△	△	並	やや少
	灰色かび病	□	△	△	△	△	並	やや少
	茎疫病	□	△	△	△	□	—	並
	食葉性鱗翅目幼虫	□	△	△	△	□	やや早	並
菜豆	菌核病	△	□	□	△	□	並	やや少
	灰色かび病	△	△	□	△	□	並	やや少
	黄化病	△	△	□	△	△	—	並
	タネバエ	△	△	△	△	□	—	並

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		30	R1	2	3	4	発生期	発生量
ばれいしょ	疫病	△	△	△	△	□	並	並
	軟腐病	◎	□	△	△	□	—	並
	黒あし病	□	□	□	△	□	—	並
	そうか病	△	□	□	◎	△	—	並
	粉状そうか病	□	△	□	△	□	—	並
	アブラムシ類	△	△	△	△	△	やや早	やや多
てんさい	褐斑病	△	△	△	△	◎	やや早	やや多
	根腐病(黒根病含)	△	△	△	△	△	—	並
	黄化病	△	△	△	△	△	—	並
	ヨトウガ (第1回)	△	△	◎	□	△	やや早	やや少
	ヨトウガ (第2回)	△	△	□	△	△	やや早	やや少
たまねぎ	白斑葉枯病	□	△	△	△	△	並	並
	軟腐病	◎	△	△	△	◎	—	並
	乾腐病	△	△	△	△	△	—	並
	ハエ類(タマネギハエ、タネハエ)	△	◎	◎	□	□	—	並
	ネギアザミウマ	△	◎	◎	□	△	やや早	やや多
	ネギハモグリバエ	△	△	△	△	△	やや早	やや少
だいこん	軟腐病	□	◎	□	△	□	—	並
	キスジトビハムシ	△	△	△	◎	△	—	並
あぶらな科 野菜 <sup>注2)</sup>	コナガ	△	△	△	□	△	やや早	やや多
	ヨトウガ	△	△	□	□	△	やや早	やや少
りんご	モニリア病	△	△	△	△	△	遅	少
	黒星病	◎	◎	◎	△	△	やや早	並
	斑点落葉病	◎	◎	□	△	□	並	並
	腐らん病	◎	◎	◎	◎	◎	—	多
	ハマキムシ類	△	△	□	◎	△	やや早	やや少
	モモシンクイガ	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	ハダニ類	△	◎	△	◎	△	やや早	やや多
	キンモンホソガ	△	△	□	□	□	やや早	並

## 令和5年度に多発が予想される病害虫

### 1. 水稻の紋枯病

紋枯病（疑似紋枯症を含む）は高温多湿で多発しやすい。近年は本病の防除が実施されていないほ場が多く、発生ほ場では伝染源の密度が高まっている可能性がある。本年は夏季の気温がやや高いと予報されており注意が必要である。窒素肥料の多用を避けると共に、前年に発生が確認されたほ場では出穂前の薬剤散布を実施する。

### 2. 水稻のヒメトビウンカおよび縞葉枯病

ヒメトビウンカはイネ縞葉枯病を媒介し、ウイルス保毒虫率が高いほど、また、本種の発生量が多いほど、縞葉枯病の発生は多くなる。前年秋期の予察田畦畔すくい取りによる幼虫捕獲数は平年より多く、越冬密度は高いと推測される。本年は春季の気温がやや高いと予報されており、第1回成虫の発生はやや早いと予想される。また、一部地域では保毒虫率が高い地点も認められていることから、縞葉枯病常発地域においてはウンカ類に有効な箱施用剤を使用する。ウンカ類に有効な箱施用剤を使用できない場合は、移植後から6月上旬に水面施用剤または茎葉散布剤での防除を実施する。道外では、イミダクロプリド剤およびフィプロニル剤に抵抗性を持つヒメトビウンカ個体群が確認されている。道内でこれらの薬剤に対する抵抗性または感受性低下は確認されていないが、前年に育苗箱施用および茎葉散布において防除効果が十分に得られなかった場合には、本年は他の薬剤に変更することを検討する。

### 3. 水稻のアカヒゲホソミドリカスミカメ

アカヒゲホソミドリカスミカメは出穂期頃に成虫が畦畔から本田に侵入し、成虫および幼虫が穂を加害して斑点米被害を生じさせる。高温少雨条件では、本田への侵入、増殖、加害が活発になる。前年秋期の予察田畦畔すくい取りによる幼虫捕獲数は平年並であることから、越冬密度も平年並であると推測されるものの、本年は暖候期（6～8月）の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されているため、本田への侵入はやや早く、発生量および被害はやや多くなるものと予想される。薬剤防除にあたっては出穂期の基幹防除が重要であり、多発時は適切な散布間隔での追加防除が必要である。

### 4. 小麦の赤さび病

赤さび病は高温多照で多発しやすい。本年は4月の気温が平年よりやや高いと予報されている。そのため、本病の発生に好適な条件となり初発時期が平年よりやや早くなると予想される。また、6月の気温は平年よりやや高いと予報されていることから発生量はやや多いと予想される。主要品種の「きたほなみ」は抵抗性“やや強”であるものの、近年多発生となる場合があるため「きたほなみ」においても注意が必要である。上位葉での発病後の防除では十分な効果が得られないため、多発が懸念される場合には、止葉抽出期までに薬剤散布を開始する。

### 5. 春まき小麦のムギキモグリバエ

ムギキモグリバエは、幼虫が小麦の茎内に侵入、加害する。生育初期の加害では無効分けつが増加し、出穂直前の加害では白穂や傷穂被害となる。また、出穂前の加害による出すくみ被害により有効穂数が減少するが、被害に気がつきにくく注意が必要である。春まき小麦では、は種が遅くなる程被害が大きくなりやすい。前年は本種の発生量が平年よりやや多く、秋季も高温に経過したため越冬密度は高いと推測される。本年4月の気温はやや高いと予報されており、第1回成虫の発生はやや早いと予想される。春まき小麦では早期は種に努め、6葉期頃までに茎葉散布を実施する。高温経過により小麦の生育が早く進む場合、防除適期を逸しないよう注意する。

### 6. ばれいしょのアブラムシ類

アブラムシ類は6月上旬から8月下旬にかけて複数種が発生し、各種ウイルス病を媒介する。前年の発生量は平年よりやや少なく、越冬量はやや少なかったと推測されるものの、高温少雨の条件で発生が多くなり、本年は春季および暖候期（6～8月）の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されているため、ほ場への飛来はやや早く、発生量はやや多いと予想される。原採種ほ場では定植時に薬剤の播溝施用を行う。60日から70日で薬剤の効果が低下するため、その後は防除ガイドに準拠した茎葉散布を実施する。主要種であるジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモアカアブラムシ、ワタアブラムシはそれぞれ薬剤の効果が異なるので注意する。後半に発生が増加するワタアブラムシは下位葉に好んで寄生するので、薬液が十分にかかるよう散布を行う。

## 7. てんさいの褐斑病

褐斑病は7～8月が高温多湿な年に発生が多くなる。本年は夏季の気温が平年よりやや高く、降水量は平年並と予報されている。また、前年の発生量は平年よりやや多かったことから、感染源が多いと推測される。特に局地的に発生が多かった地域では注意が必要である。このため本病の発生時期は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや多くなると予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。また、チオファネートメチル剤、QoI剤、DMI剤およびカスガマイシン剤では道内広く耐性菌が発生しているため、薬剤の選択には注意する。薬剤散布にあたってはマンゼブ剤を基幹とし、散布開始は初発期までに行う。薬剤の残効を考慮し適切な間隔で散布する（マンゼブ水和剤は14日以下、銅剤は7日以下）。耕種的対策（連作の回避、抵抗性“強”品種の導入）に積極的に取り組む。

## 8. たまねぎのネギアザミウマ

ネギアザミウマは、高温で早発・多発しやすく、少雨で多発が助長される。本種に対する薬剤防除は、適切な時期に開始すること、適切な防除間隔で効果の高い薬剤を使用することが重要である。本年は春季および暖候期（6～8月）の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されているため、発生量がやや多くなるものと予想される。たまねぎでは通常6月上旬以降に防除を開始するが、高温経過により初発期は平年よりやや早いと予想されるため、適期に防除を開始するよう注意する。また、ピレスロイド剤抵抗性系統が道内の広い範囲で確認されており、他系統薬剤に関しても連用多用は避け、異なる系統の薬剤によるローテーション防除を徹底する。

## 9. あぶらな科野菜のコナガ

コナガは道内では越冬が困難なため、春季に道外から飛来する個体群が発生源となる。本年は春季の気温がやや高いと予報されているため、第1回の幼虫発生がやや早くなると予想される。また、暖候期（6～8月）の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されているため、密度が高まるおそれがあり注意が必要である。近年ジアミド剤感受性低下個体群の飛来が確認されているものの、本系統剤の使用をコナガの世代内に1回以内とすることで感受性低下リスクを管理できる。適正な使用間隔の目安については「ジアミド系薬剤感受性低下個体群に対応したキャベツにおけるコナガの防除対策」（令和4年度指導参考事項）を参照する。なお、抵抗性が発達することのないように異なる系統の薬剤によるローテーション防除を徹底する。

## 10. りんごの腐らん病

腐らん病は発病部位から病原菌の胞子が分散し、感染源となる。近年発生が多い状況が続いており、感染源の除去対策が十分ではない園地もあると推察される。このような状況から本病の発生量は平年より多いと予想される。春先には休眠期防除を実施する。感染源を除去するために、発病部位を見つけ次第、削り取りや切り落としを行う。特に夏季になると発病部位が見つらなくなるため、早期から園地の観察に努める。削り取り等で出来た傷口が病原菌の侵入口となるため、薬剤を含んだゆ合剤を塗布する。樹勢が弱ると感染しやすくなるため、樹勢を維持するために適切な栽培管理を行う。

## 11. りんごのハダニ類

前年は渡島地方などでハダニ類の発生が目立った。前年にリンゴハダニの発生が目立った地域、園地では、越冬卵密度が高まっている可能性が高いことから、休眠期のマシン油散布などによって越冬卵密度を低下させることが望ましい。本年4月の気温はやや高いと予報されているため、りんごの生育およびリンゴハダニの越冬卵ふ化時期が早まることが予想される。暖候期（6～8月）の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されているため、夏季のハダニ類の密度は高まるものと予想される。ナミハダニでは多くの系統の薬剤に対し抵抗性または感受性低下が確認されているため、夏季の薬剤散布にあたっては、同一系統剤の使用を年1回にとどめたローテーション防除を徹底し、散布ムラのないよう丁寧に散布する。